

「君死にたまふことなかれ」、と青踏時代

与謝野晶子は日露戦争に従軍する弟に向かって、「君死にたまふことなかれ」という詩を贈った。

時代が大正に移つろうとしている時に、平塚らいてうと新しい女性たちが「青踏」という同人誌を発行した。そして

原始、女性は実に太陽であつた。

真正の人であつた。

今、女性は月である。他の光によって輝く病人のように蒼白い顔の月である。と

明治四十四年八月下旬、女たちの行く手に高々と解放の旗を掲げる「青踏」が、五人の若い女性によって、当時の女性作家を動員した原稿も集まり、編集や校正も済んで、残すところは、前掲の「創刊の辞」を待つばかりであつた。

既に、与謝野晶子は、明治三十四年に「みだれ髪」を出し、尾崎紅葉の「金色夜叉」は明治三十六年に、発行を終わっている。

夏目漱石の「我輩は猫である」も四十年に出され、島崎藤村の「若菜集」も、明治三十年に刊行を終えて、正に「大正ロマン」の時代が、目の前に来ている世相であつた。



「青踏」創刊号「潜める天す、の巻挿をめざし、女性が集団でものを書いた。